

『世説新語』と魏晉文化

— 文人と個性 —

大橋 由 治

一 はじめに

儒學が前漢に重用されたことにより、統治者は儒學が定める禮と道德的規範を外在的な規律として完全なる人格を修養することを社會的な義務とした。これは人々に絶対服従を求めることであった。これにより一個人が社會的存在として承認されるためには、自分を偽りながら建前の假面を付けて生活する必要があった。極言すれば、最も自分を偽った者が、社會的な評價も最も高かったのである。史書が顯彰する孝子、忠臣、烈女の事跡をみれば、その間の事情を想像するにあまりあるであろう。後漢に至って、察舉制度が推進されたことにより、官職や名譽を得るために偽善的行動を行うことが普遍的になっていった。しかし自然を尊崇する魏晉文人からすれば、各個人はそれぞれの自然な心性に遵って生活していくべきであった。それが動亂期であっても安定期であっても、寛容であっても不寛容であっても、鷹揚であつても吝嗇であつても、ただそれがその人自身の個性が自然に表れたもので、建前を取り繕つたものでさえなければ、肯定すべきものであつた。阮籍は「上は三公を圖らんと欲し、下は九州の牧を失はざる」ために「唯だ法は是れ修め、唯だ禮は是れ克くす」といった似非君子に對して嫌惡感を示し、彼らを揮の蝨と痛罵した^①。魏晉の人々は心に異なつた振る舞いをして自分を偽つたり、ましてや他人を諭したりすることができないので、當然喜怒哀樂については、その最

も強い感情が率直に出てしまうのである。以下の王述の逸話はそうした自然にしたがい感情を表出する魏晉文人の姿が端的に描かれている。

王藍田性急。嘗食鷄子、以筋刺之、不得、便大怒、舉以擲地。鷄子於地圓轉未止、仍下地以屐齒蹶之、又不得、曠甚、復於地取內口中、齧破即吐之。王右軍聞而大笑曰、「使安期有此性、猶當無一豪可論、況藍田邪。」

王藍田性急なり。嘗て鷄子を食らはんとして、筋を以てこれを刺すに、得ず。便ち大いに怒り、舉げて以て地に擲つに、鷄子地に於いて圓轉して未だ止まず。仍りて地に下し、屐齒を以てこれを蹶まんとするに、又得ず。曠るこゝと甚だしく、復た地に於いて取りて口中に内れ、齧み破りて即ちこれを吐く。王右軍聞きて大いに笑ひて曰く、「安期をして此の性有らしむとも、猶ほ當に一豪の論すべきこと無かるべし。況や藍田をや」と。^②

氣品を尊び雅量を追求する魏晉の名士達にとっては、感情をコントロールし、喜怒哀樂を顔色に表さないことが求められる。謝安は謝玄の淝水での大勝利を聞いても、動じず、引き續き人と碁の對局を續けた。顧雍は中年になって子を亡くし、その知らせを聞いた後、爪を以て掌を掐へ、血流れて褥を沾すほどであったが、依然として泰然自若としていた^③。かれらは、ことさらに王述のように率直な行動を取らないのである。王述は他人の評價のために生きることを受け入れず、率直に他人と異なる個性を表出しようとしたと言えるであろう。

王述轉尙書令、事行便拜。文度曰、「故應讓杜許。」藍田云、「汝謂我堪此不」文度曰、「何爲不堪。但克讓自是美事、恐不可闕。」藍田慨然曰、「既云堪、何爲復讓。人言汝勝我、定不如我。」

王述 尙書令に轉じ、事行われ便ち拜す。文度曰く、「故より應に杜・許に讓るべし」と。藍田 二云ふ、「汝謂へらく、我此に堪ふるや否や」と。文度曰く、「何爲れぞ堪へざらん。但だ克讓は自ずから是れ美事なり。恐らくは闕くべからざらん」と。藍田慨然として曰く、「既に堪ふと云ふ、何爲れぞ復た讓らん。人は汝我に勝ると言ふも、定め

て我に如かず」と。^④

本條は劉孝標注引用の『王述別傳』に、「述は常に以て人の世に處するに、當に先ず己を量りて後動き、義として虚讓無かるべしと爲す。是を以て應に辭するべきは便ち當に固執すべしとす。其の貞正踰えざること、皆な此の類なり」とある。人物品評中の品評者の言がその實に過ぎていたり、品評される者の虚偽の形式的行動に對して、王述は仇の如くに憎んだ。ひとたび士人が集えば、王導の位が高いため、王導が發言するたびに、皆は競って太鼓持ちをした。ただ王述だけが彼に反論した、「主は堯舜に非ざるに、何ぞ事事皆是なるを得んや」と。王導本人ですら衆人の媚態に對して不快ないやらしさを感じていたのだろう。そこで王述の言葉に對して「甚だ相嘆賞」したが、劉孝標は王導の嘆賞は「意は贊述の徒を譏る」と解釋している。^⑤

上述の逸話とその注釋は個性を追求する時代の潮流の中にあつて、王述の率直さはけして贊同を得られなかつたわけではないことを物語っている。荀粲等の人の妻子に對する眞心、王戎等の子供を亡くした後の哀悼は、まぎれもなくどれも本心の現れ出たものであつた。残忍であつたり奢侈であつたりその行爲自體はけして容認できないような極端な行動ですら、その行爲は自然な本姓にしたがつた行爲だと言ふことが出来る。例えば王戎が種に穴をあけて李を賣つた等の吝嗇行爲^⑥のごときも、外在的な規範よりも内心の自然にしたがつたために表出された個性なのである。

こうしたことから魏晉時代は文人の個性が花開いた時代と言ふことが出来るであろう。魏晉文人の個性の中でも特徴が突出しているのは狂態と偏屈である。以下本論ではこの二つの特徴から魏晉文人の個性について考えてみたいと思う。

二 狂態

狂を體した放埒な行動は魏晉文人の特徵的行動の一つである。魏晉以前にも、歴史上に狂を體した人は多いが、彼らの大半は狂態を諫言の手段としており、相手と疎通を圖る目的を果たすためのものであった。ところが魏晉文人の狂は、實利を求める意圖は全くなく、その意味においては制約を脱しており自由の狂と言うことが出来る。彼らは現實に對して失望するとともにその現實世界において責任を擔うことに對して興味を失せており、狂放的行爲で現實を痛烈に否定しているのである。

劉伶恆縱酒放達、或脫衣裸形在屋中、人見譏之。伶曰、「我以天地爲棟宇、屋室爲禪衣、諸君何爲入我禪中。」

劉伶嘗に酒を縱にし放達なり。或るとき衣を脱ぎ裸形にして屋中に在り。人見てこれを譏る。伶曰く、「我は天地を以て棟宇と爲し、屋室を禪衣と爲す。諸君何爲れぞ我が禪中に入る」と。^⑦

禮教は人々に規矩を遵守し、慎みぶかく上品であることを求めるものである。しかし、劉伶はそうした禮教とは相反する基準にしたがって自己を形成せざる得なかったことをこの説話は物語っている。なぜならば、漢代の儒者に金科玉條として遵奉された禮教は、魏晉文人にとっては唾棄すべき偏狹な規範でしかなかったからである。統治者が禮教にこだわった本當の理由は、統治上の必要からであったことは、彼らにもはっきりとしていたのである。これにより彼らの個性と禮教との衝突は、當初よりも比較的強い政治色を帯びているのである。それは魏晉の統治者は往々にして禮教を維持することを名目として自らに同調しないものを抹殺してきたからである。孔融や嵇康はともに禮教に反したとの罪名のもと處刑された。その他の文人も處刑されることを願いはしなかったが、心を違えて統治者やその保護するところの

禮教に媚びることもしなかった。偏狹な基準を押しつけ、自由な表現を容認しない社會環境に在っては、一個人の個性的行動は社會で許される範圍内を保持するしかない。もしそうでなければ孔融や嵇康のように處刑されるしかなかったのである。これはまぎれもなく個性を抹殺することであり、魏晉文人にとっては精神的苦痛の根源であった。彼らは爲政者として自らが輕蔑するものから抑壓を受けたためにはげしく苦しんだ。その苦痛には耐えるしかないのだが、しかしどこまでも耐え續けるわけにはいかない。苦痛が限界を超えないために、彼らは酒を飲んだのである。そして自分に麻酔をかけたのである。換言すれば、こうした人の飲酒の程度と、その苦痛および個性の顯現の程度とは、相互に關連しているのである。彼らは苦痛を味わうほどに、いよいよ酒におぼれ、それにつれいよいよ魅力的な個性を發揮するのである。

劉伶病酒、渴甚、從婦求酒。婦捐酒毀器、涕泣諫曰、「君飲太過、非攝生之道、必宜斷之。」伶曰、「甚善。我不能自禁、唯當祝鬼神、自誓斷之耳。便可具酒肉。」婦曰、「敬聞命。」供酒肉於神前、請伶祝誓。伶跪而祝曰、「天生劉伶、以酒爲名、一飲一斛、五斗解醒。婦人之言、慎不可聽。」便引酒進肉、隗然已醉矣。

劉伶酒を病みて渴つすること甚だしく、婦に従ひて酒を求む。婦酒を捐て、器を毀ち、涕泣して諫めて曰く、「君が飲ただ過ぎたり。攝生の道に非ず。必ず宜しくこれを斷つべし」と。伶曰く、「甚だ善し。我は自ら禁ずること能はず、唯だ當に鬼神に祀り、自ら誓いてこれを斷つべきのみ。便ち酒肉を具ふべし」と。婦曰く、「敬みて命を聞く」と。酒肉を神前に供へ、伶に請ひて祝誓せしむ。伶跪きて祀りて曰く、「天劉伶を生み、酒を以て名と爲せり。一飲一斛、五斗にして醒を解く。婦人の言は、慎みて聽くべからず」と。便ち酒を引き肉を進め、隗然として已に酔ひたり。⑧

ここに記される劉伶が酒におぼれる様は、さながら中毒患者のようである。これほどまでにいたるにはその背後に明ら

かに一方ではない理由が横たわっている。それはおそらく政治上の問題であり、司馬氏政權との見解の相違であったと思われる。この點について史傳には明言していないが、彼と阮籍、嵇康とは初対面でも意氣投合する仲であって、「欣然として神解し、手を携えて林に入り、初め家産の有無を以て意に介すると爲さず^⑨」といった記述があり、さらに彼が何日か健威參軍になった後に結局無爲無用の思想を宣揚したことにより罷免されたのであるから、こういった推測もあながち根據の無いものとは言えない。政治上の絶望は、彼を酒浸りにさせた。酒が彼にわだかまった不満を増幅させ、彼に自分自身を世上の異端者だと認識させた。その結果「肆意放蕩にして、宇宙を以て狭しと爲^⑩」さしめ、「常に鹿車に乗り、一壺酒を携へて、人をして鍤を荷ひてこれに隨はしめて、曰く、「死すれば便ち地を掘りて以て埋めよ」と。形骸を土木とし、一世に遨遊」せしめた。『文選』卷四十七に收める彼の『酒德頌』は、こうした彼特有の精神をより濃密に表現しているのである。

阮籍は竹林の七賢の代表的存在である。彼は狂態、醉態のどちらにおいても先の劉伶に優るとも劣らない。ただその個性的な行動に秘められた社會に對する批判精神は遙かに突出していた。例えば『禮記・曲禮』の規定では兄嫁と挨拶を交わす事ができないが、彼は事もあるうか兄嫁と會話をし、「禮豈に我が輩のために設けんや」と公言した。常禮によれば母の喪中には肉を食べないのであるが、彼は喪中に酒肉を喰らい、平然としていた。禮教では男女が親しく授受しないよう規定していたが、阮籍はいつも隣家の婦と一緒に飲酒し、酔ってその側で眠り、「夫始め殊にこれを疑ひ、伺ひ察するに、終に他意無し」であった。

彼は酒のために官を求めるほどに酒に執着した。こうした酒への嗜好性は、精神的な苦痛の程度や個性の強烈さを物語るものでもある。王恭が王忱に阮籍を司馬相如に比べてどうかと尋ねた時、王忱は正面から答えることをせず、「阮籍は胸中に壘塊あり、故に酒を須ひてこれを澆ぐ^⑪」と評した。所謂「壘塊」（胸に蟠る不平不満）とは、個性によって

充分に昇華することのできない心中の暗部である。しかし生命を全うするためには嵇康のように思うがままにふるまうわけにはいかない。このために心の中に鬱々と蟠りしこりのようになった氣である。これは司馬昭ですら承認して言っている、「阮嗣宗は至慎なり、これと言ふ毎に、言は皆な玄遠にして、未だ嘗て人物を藏否せず」と。ここで引き合いに出されている司馬相如は漢の武帝の時代に仕え、高位につくと間もなく隱居して天壽を全うした人物である。劉孝標はこの部分に「阮は皆な相如に同じくして、飲酒異なれるのみを言ふ」と注している。おそらく、こうした「至慎」は、酒の力を借りて洗い流さなくてはならないほどの多くの苦痛を代償とした忍耐そのものだったのである。もし彼らの言動を詳細に見れば、こうした文人の個性的な表現は反禮教的であると同時に、これによって禍を蒙らないように細心の注意をはらっていたのだと解るのである。こうした觀點からみれば、彼らの個性が遺憾なく表出されたとは言い難い。そうした環境で個性を表出しながら禍を避け續けた彼らは豪毅であると同程度に自制心を有していたのである。

もし正始の頃の文人が禮教に反抗することでその個性を表現したのだとすれば、おそらくその目的は主に司馬氏が禮教で統治を維持していることを暴くことであつたのである。そしてさらにそれを借りて政治上の非協力的な立場、さらには反對の態度を表明しているのである。だからこそ、西晉になつてからは、司馬氏政權と世家名族との關係が徐々に改善されるに隨い、文人の「自然」と統治者の「名教」との衝突は徐々に家族倫理中での自然と煩雜な決まりとの衝突に移り變わつていったのである。なぜならば阮瞻、王澄、胡母輔之、謝鯤のような元康の名士は嵇康の「湯武を非り、周孔を薄んず」に對してすでに興味を持つておらず、彼らの情に任せて爲し、肆にして忌憚無しと言つた風氣は阮籍、劉伶等のような情に任せて禮を廢すの精神を繼承しながらそれを發展させたものだからである。

王平子、胡母彥國諸人、皆以任放爲達、或有裸體者。樂廣笑曰、「名教中自有樂地、何爲乃爾也。」

王平子、胡母彥國の諸人は、皆な任放を以て達と爲し、或は裸體なる者有り。樂廣笑ひて曰く、「名教の中自ずか

ら樂地有り。何爲ぞ乃ち爾るや」と。^⑭

劉孝標注が引用する王隱『晉書』には「魏末、阮籍酒を嗜み荒放、露頭散髮にして、裸袒箕踞す。其後貴游の子弟阮瞻、王澄、謝鯤、胡毋輔之の徒は、皆籍に祖述し、大道の本を得たりと謂ひ、故さらに巾幘を去り、衣服を脱ぎ、醜惡を露はし、禽獸と同じきなり。甚だしき者はこれに名づけて通と爲し、次なる者はこれに名づけて達と爲す。」と言っている。元康の名士のこうした放達行爲は少しも政治的な意圖が無いと言っている。彼らが追求したのは、ただ禮教に制限された人間的な感情や行動の自由を恢復して、人間の本性へ復歸することを求めていただけなのである。このためには行爲が行き過ぎることも辭さなかつたので、或いは公衆の面前で裸袒し、或いは穢雜な言葉を口にしたのである。こうした醜惡な行爲自體には肯定的な意味合いが無い。こうした極端な態度をとる動機は禮法を排斥し、人性の自由を追求しようとする事だったのである。正始と元康の狂態は狂態であることに違ひはないのだが、動機において異なっているのである。

三 偏屈

放埒な狂態と關連しているのが魏晉文人の偏屈とそれに發した奇怪な行動である。これは共に「人を物の役と爲す」に相対するものである。ここで言う「物」とは皇帝を頂點とする社會組織での個人に對する制約と言ひ換えることが出来る。それに因る拘束力が強すぎるあまり、漢代以來の人々の中で的人格の共通性は個性よりも遙かに大きかつた。湯用彤は「『後漢書』袁奉高は異操を修めずして、名を當世に致す。そうしてみれば當世には異操を修めて名譽を求めようとする者が多かつたことが解る」と指摘している。^⑮こうした氣風は必然的に個性を求めると奇怪な行動を増長した。

これにより異操は魏晉文人の中で磨かれて個性としていっそうの輝きを増していった。異なる點は、魏晉の奇怪な行動の目的は、すでに名聲を求めることではなく、禮教を擲擧することと個性を表現することにあつたことである。例えば、

王仲宣好驢鳴。既葬、文帝臨其喪、顧語同遊曰、「王好驢鳴、可各作一聲以送之。」赴客皆一作驢鳴。

王仲宣驢鳴を好む。既に葬らる。文帝其の喪に臨み、顧みて同遊に語りて曰く、「王は驢鳴を好めり、各々一聲を
作して以てこれを送るべし」と。^⑩

この條は劉孝標注に「按ずるに、戴叔鸞の母は驢鳴を好めり、叔鸞毎に驢鳴を爲して、以て母を説ばす。」と言つてい
る。これからすれば漢代の戴叔鸞が驢鳴をまねて母を悦ばせた目的は孝という社會的規範を満たすためであつた。では
この西晉の人が驢鳴で故人を送る弔い方は何を意味しているのであらうか。それはおそらく彼らが故人の一風變つた
趣味に理解を示していたことと、さらにはそれを尊重していたことを表しているのである。さらに例えば、

孫子荊以有才、少所推服、唯雅敬王武子。武子喪時、名士無不至者。子荊後來、臨屍慟哭、賓客莫不垂涕。哭畢、

向靈牀曰、「卿常好我作驢鳴、今我爲卿作。」體似眞聲、賓客皆笑。孫舉頭曰、「使君輩存、令此人死。」

孫子荊才有るを以て推服する所少なし。唯だ雅に王武子喪せし時、名士至らざる者無し。子荊後れて來たり、尸に
臨んで慟哭す。賓客涕垂れざる莫し。哭し畢はりて、靈牀に向かひて曰く、「卿常に我が驢鳴を作すを好む。今我
卿のために作さん」と。體眞聲に似たり。賓客皆な笑ふ。孫頭を擧げて曰く、「君が輩をして存せしめ、此の人を
して死なしむるとは」^⑪と。

衆人が葬禮を行っている時に笑いを誘うところが、あまのじゃくな孫楚が到達した獨特の悼み方である。そして彼のこ
うした行動から個性を表出しようとする意圖を見いだすことができる。當時の人々が驢鳴のほかによく好んだのが長嘯
である。

阮步兵嘯、聞數百步。蘇門山中、忽有真人、樵伐者咸共傳說。阮籍往觀、見其人擁剗巖側。籍登嶺就之、箕踞相對。籍商略終古、上陳黃、農玄寂之道、下考三代盛德之美、以問之、佗然不應。復敍有爲之教、棲神導氣之術以觀之、彼猶如前、凝矚不轉。籍因對之長嘯。良久、乃笑曰、「可更作。」籍復嘯。意盡、退、還半嶺許、聞上啗然有聲、如數部鼓吹、林谷傳響。顧看、迺向人嘯也。

阮步兵の嘯は數百步に聞こゆ。蘇門山中に忽ち真人有り、樵伐の者咸共に傳說す。阮籍往きて觀るに、其の人剗を巖側に擁するを見る。籍嶺に登りてこれに就き、箕踞して相對す。籍終古を商略し、上は黃農玄寂の道を陳べ、下は三代盛德の美を考へて以てこれを問ふに、佗然として應へず。復た有爲の外、棲神導氣の術を敍べて以てこれを觀るに、彼猶ほ前の如く、凝矚して轉ぜず。籍因りてこれに對して長嘯すること良久しくす。乃ち笑ひて曰く、「更に作すべし」と。籍復た嘯し、意盡きて、退き還ること半嶺許なるに、上に啗然として聲有るを聞く。數部の鼓吹の如く、林谷響きを傳ふ。顧み觀れば、適ち向の人の嘯なり^⑧。

本條の劉孝標注が引用する『魏氏春秋』と『竹林七賢論』に據れば、阮籍は真人の嘯聲の中に人生の要諦を悟り、あわせて『大人先生傳』を著してそれを思想的なものにまで引き上げて表出した。此より以後、「嘯」のように口で音樂を奏でるやり方は、士人の心性の自由を表すシンボルになったのである。彼らは口笛の音で、心の中のいろいろな複雑で名伏し難い感情を洗い流すのである。謝安は沖に出て遊行し、大波に向かって長嘯し、王徽之も見事な竹林を見つけ、「諷嘯良久しく」した^⑨。元康の名士謝鯤は隣家高氏の娘にちよっかいを出し、その娘に織梭を投げつけられ二本の前齒を折り、人々の笑い者になった。それにもかかわらず謝鯤は「傲然として長嘯して曰く、「猶ほ我が嘯歌を廢せず」と。」^⑩であった。彼はこのように嘯にこだわり、竟に嘯にそれ相應の評價と審美的な價値を付與したのである。

劉道眞少時、常漁草澤、善歌嘯、聞者莫不留連。有一老嫗、識其非常人、甚樂其歌嘯、乃殺豚進之。道眞食豚盡、

了不謝。媼見不飽、又進一豚、食半餘半、迺還之。後爲吏部郎、媼兒爲小令史、道眞超用之。不知所由、問母、母告之。於是齋牛酒詣道眞、道眞曰、「去、去。無可復用相報。」

劉道眞少時、常に草澤に漁りし、歌嘯を善くし、聞く者留連せざる莫し。一老媼有り、其の常人に非ざるを識り、甚だ其の歌嘯を樂しみ、乃ち豚を殺してこれに進む。道眞豚を食らひ盡くし、了に謝せず。媼飽かざるを見て、又一豚を進むるに、半ば食らひ半ば餘し、適ちこれを還す。後吏部郎と爲り、媼の兒は小令史たり。道眞これを超用す。由る所を知らず。母に問ふに、母これを告ぐ。是に於いて牛酒を齋して道眞に詣るに、道眞曰く、「去れ去れ、復た用て相報ゆべき無し」と。^②

こうしたほとんど異常とも言うべきおかしな習性は、まさに當時の環境が人々を窒息させていたことを物語るとともに、魏晉文人が個性に對して執着していたことをよく表している。人々はそうした環境においては、程度の差こそあれ個性的に振る舞うことが、我が身の安全をはかる上で障害となることをよく理解していた。驢鳴や長嘯ではけして命を落とすには至らないし、それどころか大衆とはことなることを示すことが出来る。つまり個性を表現する目的を達成することができるのである。彼らはこのようにあらゆるものを利用して自分の個性を表出するのである。もちろん、彼らのこうした放埒な狂態や異常な習性の個性は積極的なものとして評價することはできない。しかし、當時の實情からすれば、彼らに個性的な言動を許す餘地は非常に狭いものであった。こうした状況に在っても依然として彼らは個性的な表現を求めたのである。彼らにとって個性は内面のエネルギーと才能の發露だったのである。

四 結び

中國古代の知識人は積極的に道を尊び、理念的に政權の合理性と權威に説明を與えた。これにより、余氏が言うところの勢（政統）つまり爲政者も道を標榜する知識人の協力を必要とするようになった。しかし、秦の始皇帝の焚書坑儒に代表されるように王權は反對者を力でねじ伏せることで勢の尊嚴を維持しようとした。つまり古代の王權は自分と協力する條件として服従することを求めたのである。よって、中國古代の知識人はこうした制限の中で道という理想を實現させるしかなかったのであるが、結局彼らの治國平天下の願いは統治者の意見と抵觸したために實現できなかった。よって彼らにできることは、修身つまり教理を體現した完全なる人格を以て道の存在を證明することだけであった。

後漢の黨錮の禍中で清議運動が失敗したことで、當時の道と勢との協力關係は決定的に決裂した。同時にそれは道の實現を標榜する知識人が國家あるいは政治の問題に関わろうとする願いをも完全に葬り去った。そこで、知識人達は自省へ轉向し、個人の人格の追求へと轉向したのであった。これが魏晉文人の個性的行爲である。しかし、彼らの個性的行動は上述の如く儒家が取り決めたように品行方正に規矩を遵守する慎み深いものではなく、老莊思想の絶對的自由への追求を遺憾なく體現したものであった。

儒家と道家はともに個人の人格によって道を體現するのであるが、それぞれの目的は異なっている。儒家の信徒達はたとえ政統と分離した後であっても、依然として道統と政統とが協力することの合理性を説くことに拘泥していた。儒家が再び政治に協力する事を期待していたのである。それに比して道家は、完全に無君論の立場を取っているので、政

統を顧みないで自己の個人的人格を追求するのである。魏晉の文人はより多く老莊思想の影響を受けており、彼らは根本から社會秩序を卑しめそして排斥した。彼らは爲政者が人爲的に本來の姿をねじ曲げること、つまり自然を破壊する行爲をひどく憎んだ。例えば王子猷が雪の夜に戴を訪ねた故事では、王子猷にとっては、既定の目的のために規律正しくし、段取りに基づき事を運ぶように生きるのは、物に役されることで、自分を外界の目に見えぬ縛りに任せることにはかならないのである。彼らは人が物のために役されることに反抗したのである。彼らは審美的かつ遊戯的な態度で人生を謳歌しようとし、同時に個性的價値を思索したのであった。

歴史上社會階層としての文人にとってその個性と人格の形成はけして心そのままになされたものではなく各種の社會的條件の制約を受けていた。就中、統治政權の政策的制限が尤も大きかった。ところが魏晉貴族の成員である大部分の魏晉文人は經濟的、政治的に獨立していた。それにより政統が彼らを必要とするほどに彼らは政統の後ろ盾を必要としなくなっていた。ここに道統と政統は分裂し、君權政治の求心力は最低レベルまで低下した。自然が名教に勝利することで、彼らは行爲を制限していた目に見えぬ縛りを放擲してしまつたのである。社會に對して求めるものが何も無くなつてから、彼らは名教を越えて自然に任じることにより個性を發展させていったのである。それはまた統治の道具としての禮教に抗うことでもあった。

注

- ① 阮籍集「大人先生傳」。
- ② 忿狷第三十一—2。
- ③ 雅量第六—35・1。
- ④ 方正第五—47。

- ⑤ 賞譽第八―62。
- ⑥ 儉嗇第二十九―4。
- ⑦ 任誕第二十三―6。
- ⑧ 任誕第二十三―3。
- ⑨ 『晉書』卷四十九劉伶傳に「澹默少言、不妄交游、與阮籍。嵇康相遇、欣然神解、携手入林。初不以家產有無介意。」とある。
- ⑩ 文學第四―69に引用する『名士傳』および『晉書』卷四十九劉伶傳。
- ⑪ 任誕第二十三―51。
- ⑫ 德行第一―15。
- ⑬ 『文選』卷四十三所收「與山巨源絕交書」。
- ⑭ 德行第一―23。
- ⑮ 湯用彤『魏晉玄學論稿』人民出版社一九五七年刊行の「讀人物志」八頁に「後漢書袁奉高不修異操、而致名當世。則知當世修異操以要聲譽者多也」とある。
- ⑯ 傷逝第十七―1。
- ⑰ 傷逝第十七―3。
- ⑱ 棲逸第十八―1。
- ⑲ 雅量第六―28。
- ⑳ 簡傲第二十四―16。
- ㉑ 『晉書』卷四十九謝鯤傳に「鄰家高氏女有美色、鯤嘗挑之、女投梭、折其兩齒。時人爲之語曰、「任達不已、幼輿折齒。」鯤聞之、傲然長嘯曰、「猶不廢我嘯歌。」とある。
- ㉒ 任誕第二十三―17。
- ㉓ 余英時『士與中國文化』上海人民出版社一九八七年刊行の第二章「道統與政統之間」では勢を政統とも稱し、統治權力を指している。道とは知識人である士が傳承する文化を指し、これらを道統とも稱する。